

# 生活の伝承 26

発行者 民家園のつどい  
 会長 太田 隆 夫  
 発行所  
 福島市五老内町3番1号  
 福島市教育委員会文化課内  
 民家園のつどい事務局  
 TEL(024)535-1111 内線5373

## 年中行事にみる祈りとねがい

—いまさらのこと改めて考える—

太田 隆 夫

〈はじめに〉

一年のある月の特定の日には、普段毎日繰返していることと違うことを家族一同、親族、集落一同が執り行う行事。

この一定の行事が習慣的伝承的に繰返して行われることが「年中行事」という。

家の中に飾りをつけ、あるいは広げたり、家具、道具を磨いて特別なこととしてすすめた。また外側に祭り、儀礼を展開させつづけてきた。

〈年中行事とは〉

生活・暮しの中心が農業を営む日常だったとき、五穀豊饒を神に祈り、その年の稔りを感じること。そして祖霊が子孫たちのところを訪れ、飲食を共にし、喜び、楽しみ合うことを願う行事というものを中心にして、それぞれの家で行ってきた。

そして一年のうちで、時々広い意味での宗教的儀礼を営むことから、毎日に繰返す生活の過程に、ひと区切りをつける。このことによって、また翌日からの暮し、仕事、生業(なりわい)に弾みをつけた。

漢字に「節ふし」で表わすことばには、「節(せつ)」とも言える。この「せつ」ごとに神に供え物をして行事を営む。これが「節供(せちく)」—節句(せつく)となった。句は区切りの意味。

「ふし」のない暮し、その連続の生活では仕事、生業では耐えられない。単調な毎日に区切りをつける。これが「節供」で、後世に「節句」と表現し、この文字が普通となった。

〈節供のこと〉

暮しの折り目、「節」の日には神様、また祖霊が訪れるとき、或は神様がお出ましされる日(お出ましを願う日とも)。このとき神様にお供えする「供えもの」、これを「供御」とか「供物」といい、準備する。これが繰返しとなるが「節供せちく」で、変化して「節句」となった。

この日々の折り目のときを「節」としたが、いつの日か「まつり」と変化し、神様を、祖霊をもてなす(接待)ときと考え、神様や祖霊を待遇して、ご馳走する(振る舞い)こと、それが「神まつり」と呼ぶようになった。

〈ハレと褻(け)のこと〉

普段(日常)と違う日、神様を接待する特別な日を「ハレ」と考えた。この「ハレ」を「晴れ」と表

現し、心ゆたかにして仕事を休み、行ないを慎しみ深くすごすことにした。

一日を安らかにして、お出ましを願った神様（祖霊）と共に、その日を送ることにしていた。

「ハレ」の日には、「晴れ着（正装）」を身に着けて、神様に喜んで頂く。神様はこの日接待されたことを覚えて（記憶して）いて、再び「ハレ」の日に訪れてくださることを願った。

福島では「晴れ着」のことを、「アガイシヨ―赤い衣装―」と言った。「アガイシヨ」を着て、神様に感謝し、現状からの向上を祈り、これからの一層の幸せ、稔りの豊饒を念頭に向けた。

「ハレ」の特別な日に対して、平生の、普段の暮しは「ケ」とした。このときは仕事に励み、生産活動に汗をながし、子育て、集落同士の円満な交流・協力に心がけた。

### 〈赤飯、神人共食（じんじんきょうしよく）のこと〉

「ハレ」の食事、神様にお供えするものは「赤飯（或はモチ）」だった。糯米と小豆を使って蒸してつくる。また「強飯（こわいいい―おこわ）で、不祝儀には小豆を使わない「白ぶかし」をこしらえた。

私たちの暮しを遡ると、ずっと昔は米は「常食用」でなく、神祭り（ハレ）に食べることであり、現在のようにならぬ「白米」でなくて南方系の「赤米」が普通だったとされる。これが後世に「赤飯」の習慣に結びついているという。

「ハレ」―臨時的な食事に「赤飯」をこしらえ、神様（祖霊）をもてなし、この日は「お祝いの日」と設定した。これを「祝

儀」また「ご祝儀」と呼び習わすことになった。

親族のあいだ、また集落に「結婚式」があつたりすると「ご祝儀」と言ってきた。

「ハレ」には赤米を用いた「お供え」を、神様に差しあげ、祖霊たちもその供物を食べると信じてきた。この神様が食べるものと同じものを、同じ日に食べることで、私たちに神様と同じ霊が身体に満ちることを信じてきた。

神様に供えたものと同じものを食べる、これを「相饗（あいこえ）」また「直会（なほらい）」とよんできた。神様と人々が、一緒に食事することを「神人共食（しんじんきょうしよく）」と言って、「ハレ（祭り）」の大切なこととしてきた。

この神人共食は、神様がお出ましになったとき、同じ屋根の下に休息し、同じ食膳について、神様が示してくださる新しい活力、ものを産み出す霊力を分けて頂く、その場所に参加、居合わせることで、神様（祖霊）とともに過ごす時間の幸せを思った。

家族、親族、集落に住む人たちが、供え物と同じものを食べる。同じ屋根の下、血縁、地縁が共に寝食をともにする喜びは、神様と共食した幸せを、神様へのお礼、誓いにつながって、次ぎに控える「ハレ」につづいた。

### 〈「ヨミ」と月読みのこと〉

日々の繰返しのなかで、その日を数える日を読むことの原型は「かよみ」と言われたという。

ついでに 月が頭つで、朔日とも言われてきた。その次ぎは、

二日(ふつか)、三日(みつか)、四日(よつか)、五日(いつか)、六日(むいか)、七日(なのか)、八日(ようか)、九日(このか)、十日(とうか)。この言葉の最後に「か」と呼ぶことから「かよみ」が始まりで、後世「こよみ」となったという。

十日のあとの二十日を「はつか」、三十日「みそか」と、同じく「か」がついている。ちなみに十三日は「とおかあまりみつか」、二十二日は「はつかあまりふつか」と数え、この表現は、祝詞(のりと)に奏上されてもいる。

漆黒の夜が終わって、新月がでるときは朔日「さくじつ」と呼ばれる。「朔」は一ヶ月の初日の意味という。

八日(ようか)は、月の満ち(弦ゆみ)が半分になって見える、これを「上弦の月」と呼んでいる。十五日は満月、望月(もちづき)。この夜の日はまんまるに輝き、古来からいろいろな行事がもたれてきた。二十二日から二十四日、月の弦が欠けて、月はじめと逆になる。「下弦の」月で、福島地方では、正月、五月、九月二十三日の夜は、「二十三夜講(さんやさま)」として、集落で順送りの宿を設け、月を礼拝した。



## 屋根葺きの話

加藤重芳

### 越後の屋根葺

庄野宇立屋敷の阿部家の旧墓地に一基の墓碑があり。俗名不明、戒名は

全翁良心禅定門  
紅顔妙葉禅定尼  
安政六末年九月廿九日

越後国  
屋根屋  
連中  
十二名

とある。(一八五九年)



江戸末期に越後から出稼に来た人達が世話になった夫婦の為に建てた供養墓であるという。昔の百姓屋は野郎屋根と云って軒先の出が小さく、くしの飾りもなく、ただ雨露を凌ぐだけ(阿部家・菅野家)。明治になつて養蚕が盛んになると、関東地方から小野家のように大形で梁を長く突き出した船楯造りといつて軒先を高く・縁側を付け、屋内を明るく、通風良く、屋根裏を蚕の上簇に使用するようにした。

### 尾形幸三の話

明治の末頃、越後の仁一郎という屋根葺が雪の多い越後の屋根葺技術を伝承した。

以来福島屋根葺も大型の屋根の軒先の作り方に力竹を多用したりして雪に強い屋根になったという。

### ※尾形幸三

平成元年没 行年八十八才

二子塚生れ 桜本尾形に婿入り

農間屋根葺を業とし米沢地方迄出稼をした。箕造の名手で、社交的に話上手。誰からも敬愛されていた。

明治になつて越後から仁一郎という職人かやって来て、越後地方の雪の重みに耐える屋根葺技術を伝承した。

### ぐし祭り和大根

ぐし祭りにはお祝いに御神酒を上げ餅を撒く。その時大根を輪切りにして餅と一緒に撒く。これは餅は大根と一緒に喰えば

「胸が焼けない」「棟が焼けない」棟と胸と同音なので縁起をかついたものである。

### ぐしは串なり

昔、吝な旦那がいて屋根を葺いたがぐし祭りをしなかった。ところが暫くして雨が降ったところ、旦那の頭に雨だれが降ってきた。困った旦那か屋根葺を呼んで怒ったところ「旦那様、これはぐし祭りをしないので神様が怒っていなさるんだ」という。そこで酒と餅を上げて祈ったところ直ぐに止ったという。

幸三の話では「それは旦那の頭のところに竹串を刺しておいたんで、それを抜けば雨だれは止まるんだ」という。「ただ狙ったところに雨だれを落とすのはよほどの名人でないとなかなかうまく行かないもんだ」という。

### 屋根葺の計算

家を造ることは勿論一〇年に一度の屋根葺は一大事業であった。

近世の農家は行間四間梁間五間程の標準形で地坪(建坪)二〇坪屋根坪は倍の四〇坪、坪當三駄として一二〇駄。

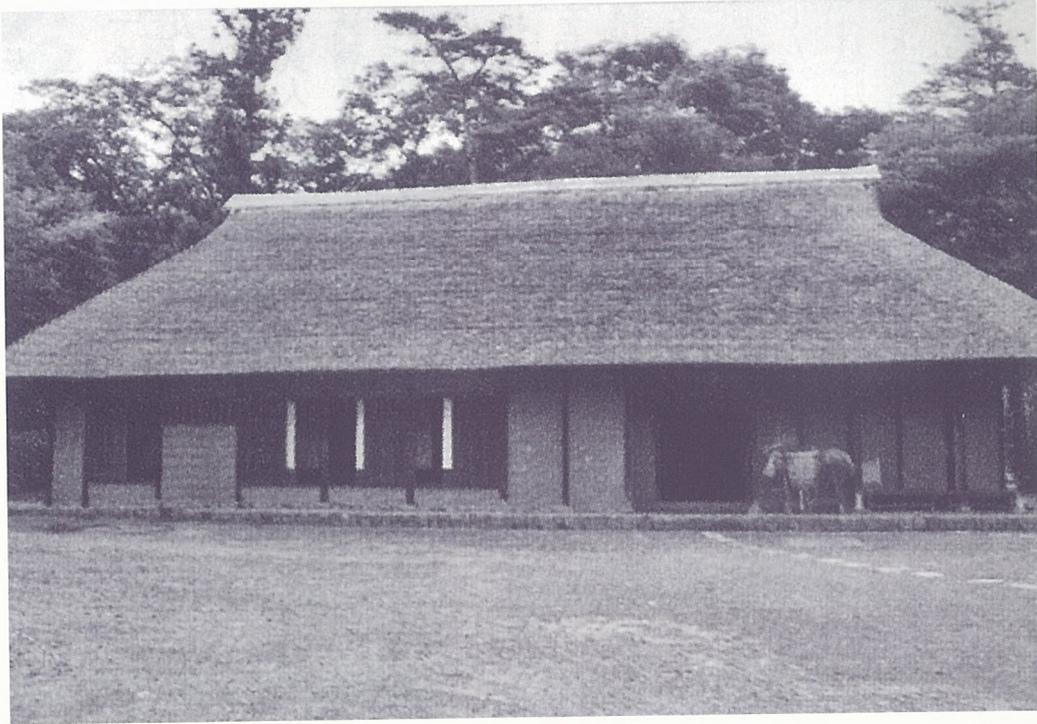
一駄というのは小束四把で一束づつ、馬の両脇に三つで合計六把を一駄という。

これだけの萱を集めるのは大変であるから仲間と集まって助け合いをする。

これを結(ゆい)又は合力という。

毎年一〇駄位の萱を刈って合力し、労力奉仕もして、我が家

の場合に協力してもらおうのである。  
 その外、必要な縄・竹・細木（足場）なども準備しなければ  
 ならないのである。



## 「節分」で旧渡辺家が祭事を行わない謂われ

渡辺 安治

福島市民家園の年中行事で旧渡辺家が節分の祭事を行わない謂われ因縁について、諸資料（民家園のてびき・年中行事の再現・生活の伝承、など）に触れられて無いと思われ、同じ姓を持つ者として紙面を頂きました。

これは故事・説話・逸話など、どの分野に属するものか定かではありませんが知り得る範囲を記してみます。（但し、諸説有り）

「謂われの概要について」平安時代中期の武人である渡辺綱が京都一条戻橋で鬼の腕を源氏の名刀「髭切りの太刀」で斬り落としその片腕を持ち帰ったが、七日間の内に取り返すと言う鬼の捨て台詞に気を引き締め、片腕を入れた唐櫃を封印し七日間は屋敷に誰も入れず家に閉じこもり物忌みをしていたが、七日目に摂津の国から綱の伯母が屋敷を訪れ、綱の武勇伝を聞きおよび参った是非鬼の片腕やらを見せて欲しいと懇願され、仕方なく唐櫃を開き片腕を出すと、じっくり見ていたが、突然、伯母は片腕を持ったまま飛び上がり煙出しから空の彼方に消えたという。この伯母は実は鬼が化した姿であった。

綱の鬼退治の武勇は馳せたが、結局煙出しから逃げられたとの結末だが、一人果敢に鬼を退治したので渡辺家では節分の「鬼は外！」の掛け声無し。

但し、煙出しを設置することがはばかられていた。

時に、旧渡辺家は旧奈良輪家や旧阿部家のような煙出しが無く寄棟造り片入母屋となっており東側上部に若干の空き口がある程度である。これは如何か！

「時代背景」平安中期 第六十六代一条天皇 平安京時代

「登場人物及び妖怪」

1 源頼光 武将 守護 家臣四天王有り

2 渡辺綱 武人 主君頼光の四天王筆頭として剛勇で知ら

れ、乱暴狼藉者の「酒呑童子」を大江山で、「鬼同丸」を洛北の市原野に於いて其、主従で征伐し、都をもとの平穏な暮らしに戻した。

その後「謂われ概要はじめの如く」果敢に一人で京都一条戻橋で鬼の片腕を切り落とした。

3 主君 頼光の四天王 渡辺綱・卜部秀武・碓井貞光・坂

田金時 (名高い金太郎)

4 酒呑童子 (妖怪) 鬼の姿をまねて京都界隈の財宝や婦女子を掠奪した盗賊で丹波国伊吹山に住んでいた。

5 鬼同丸 (妖怪) 鬼の姿をまねて京都界隈の財宝や婦女子を掠奪した盗賊で洛北の市原野に住んでいた。酒呑童子の舎弟とも言われている。

「吾がふるさとで渡辺の端くれ當時は」

やはり、幼少期は祭事を行っていなかったが小学校低学年になり節分を迎えると隣近所の学童どもが彼方此方から声高らかに「鬼は外！云々」を唱えると羨ましくなり、親にせがみ我が

家も仲間入りをしたが、やがて気取ずかしさを感じ6年生頃以降は取り止めてしまい渡辺姓を有り難く感じておりました。

豆撒き後の豆を拾い歳の数以上を食べたり、保存をし置き夏に雷がなると取りだし、効能があるものと信じ食べていたことを思い出します。

さて、何年前頃からか周囲の一般家庭より、豆撒きの声は全く聞かれなくなりました。このような行事は次から次と姿を消し伝承の難しい時世になりつつあります。



# 第8回公園フォトコンテスト



第8回公園フォトコンテストにおいて、民家園の行事等を対象とした写真が入選しましたので、ご紹介いたします。

特別賞



「タイムトラベル」 浅野 良さん (福島市)

優秀賞

「読書の秋」  
佐藤 広中さん (福島市)



入選

「楽しい小正月」  
古関 キヨ子さん (福島市)



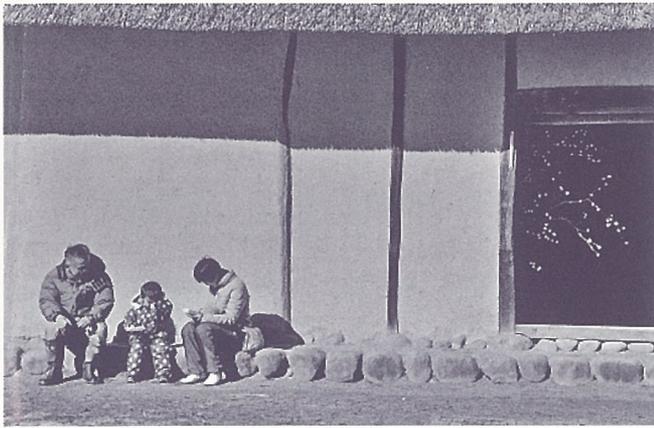
入選

「本気だよ！」  
荒川 貞一さん (福島市)



入選

「張切る少年を先頭に」  
佐々木 俊昭さん (福島市)



佳作

「ひととき」  
熊田 浩さん (本宮市)



佳作

「刈ったぞー」  
佐藤 光政さん (二本松市)



佳作

「みんなで応援」  
阿部 幸次郎さん (福島市)



佳作

「春を待つ」  
栗原 陽子さん (福島市)

今回も民家園を題材にした作品が多数寄せられました。

今年も、第9回公園フォトコンテストを平成27年6月頃に実施する予定です。(応募の対象となる写真は、平成27年1月1日から平成28年1月末日に撮影されたものです) 皆さまからの応募をお待ちしております。